様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年３月３１日現在

機関番号：３３９１７
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2010
課題番号：２１７２００１２
研究課題名（和文）　現代倫理学における「ヒューム主義」に関する哲学史的研究

研究課題名（英文）　Study on a History of the idea of “Humeanism” in Contemporary Ethics

研究代表者
奥田　太郎（OKUDA TARO）
南山大学・人文学部・准教授
研究者番号：２０３６７７２５

研究成果の概要（和文）：現代倫理学の議論において主要なテーゼとして前提されている「ヒューム主義」の系譜を文献的に辿り、「ヒューム主義」という思考の枠組みの哲学的意義を探った。現在論じられている枠組みから探究を開始し、100 年間の現代倫理学史を遡る形で、「ヒューム主義」を哲学史的に検討した。その結果、「ヒューム主義」は、その内容において、ヒュームの哲学とは異なる倫理学上の問題から派生してきたことがわかってきた。このことにより、現代倫理学における「ヒューム主義」の哲学的意義がより明確に捉えられると思われる。

研究成果の概要（英文）：This research project attempted an investigation of “Humeanism,” which is one of the most significant philosophical frameworks for contemporary philosophical ethics, from the perspective of history of philosophy. It was investigated by examination of relevant literatures with starting from recent controversies and extending back a hundred year. As a result, it was elucidated that “Humeanism” seems to be virtually derived from different philosophical issues in ethics, independently of Hume’s philosophy itself. On this finding, philosophical significance of “Humeanism” in contemporary ethics may come into focus all the more.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,400,000	420,000	1,820,000
２０１０年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・倫理学
キーワード：ヒューム主義、信念／欲求モデル、適合の向き、実践理性の懐疑論、内在主義／外在主義、動機づけ、直観主義、行為の理由

１．研究開始当初の背景

(1) 現代倫理学の「ヒューム主義」とは、敢えて端的に述べるなら、行為の説明には欲求と信念の組み合わせが不可欠であるとする行為論上の心理モデルに基づき、動機づけ理由はまずもって欲求によって構成され、規範理由に関わる合理性は行為者の欲求に相関的である、という道徳心理学上の学説の一つである。

(2)その名の通り、18 世紀スコットランドの哲学者デイヴィッド・ヒュームの哲学に由来するとされ、20 世紀後半以降のメタ倫理学の道徳心理学領域における論争の岩盤として、

これに対する自らの態度表明を行なうことが論争の土俵に乗るための前提となってきたと言ってよい。たとえば、行為の理由に関する内在主義／外在主義の論争においては、その背景として常に「ヒューム主義」の是非が問われてきたし、道徳判断に関する内在主義／外在主義の論争においても、「ヒューム主義」的な心理モデルが重要な役割を果たしてきた。あるいは、マイケル・スミスによって「ヒューム主義」は、「道徳の中心問題を構成する第三の命題」としてメタ倫理学の混乱を理解し整理するための主軸の一つとして位置づけられている。また、マクダウェルやウィギンズらの感受性理論、ダンシーの純粋認知主義など、「ヒューム主義」に抗って生み出された重要な学説も数多あり、「ヒューム主義」という思考の枠組みは現代倫理学に不可欠なものと言って差し支えない。

(3) しかしながら、これほど多くの論者に頻繁に言及されているにもかかわらず、「ヒューム主義」として語られるものは、一定程度の共通性をもちつつも、基本的には各論者によって自らの主張内容に沿う形でその都度定式化されているにすぎない。さらに、これほどまでに理論構築の前提として用いられていながら、驚くべきことに、「ヒューム主義」の哲学史的由来についてはほとんど問われることがない。確かに、関連書を繙けば、動機づけに関するトマス・ネーゲルの問題提起、ドナルド・デイヴィドソンの行為論、アンスコム『インテンション』での信念／欲求の区別に関する議論などに負うところが大きく、また、信念／欲求の心理モデル自体は、アリストテレスの実践三段論法にも遡ることなどが示唆されてはいる。そして、ヒューム自身のテキストの中にも「ヒューム主義」として吸い上げられる要素をみいだすことは確かにできる。しかし、「反ヒューム主義」の論陣を張る当のダンシー自身が、ヒュームはヒューム主義的ではない、と述べたり、同じ論陣のウィギンズが「デイヴィドソン主義」と呼ぶべきだと述べるなど、肝心のヒュームとのつながり自体が危うい。「ヒューム主義」は、事実上出自不明のまま多くの重要理論を生み出し続けているわけである。

(4) 本研究の研究代表者は、これまでヒュームの道徳哲学を情念論から読み解く試みを継続的に行なってきたが、その過程で、現代倫理学の「ヒューム主義」とヒューム道徳哲学の相違を強く感じるに至った。その相違を明白にすると同時に、「ヒューム主義」という強力な思考の枠組みがどのように形成され、どのような系譜を辿ってきたのかを明らかにすることで、ヒューム哲学の新たな現代的可能性と、「ヒューム主義」の哲学的意義を同時に探究することができるはずである。

２．研究の目的

(1) 本研究では、現代倫理学の議論において主要なテーゼとして前提されている「ヒューム主義」の系譜を可能な限り文献的に明らかにする。たとえば、「ヒューム主義」の定式化が最初に行なわれた時点とその哲学史的文脈を明らかにする。その上で、「ヒューム主義」という思考の枠組みがもつ哲学的含意、有効性、および、その射程を、「ヒューム主義」に対する特別なコミットメントをもたない中立的な視点から明らかにする。

(2) 本研究は、現代倫理学史の一部分を整理する哲学史的試みであると同時に、現代倫理学における重要トピックそれ自体の探究でもある。ただし、あくまでも研究を牽引するのは、「ヒューム主義」というインデックスである、という点が、他の現代倫理学もしくはメタ倫理学の研究アプローチとは異なる点である。

(3) 本研究の研究代表者がヒューム自身に一定のコミットメントをもちながら、「ヒューム主義」には特別なコミットメントをもっていない（すなわち、ヒューム主義者でも反ヒューム主義者でもない）こと、かつ、ヒュームとの関係で「ヒューム主義」に無関心ではないこと、こうした研究代表者自身の探究のスタンスが、「ヒューム主義」に対する中立的な分析と検討を可能にすると思われる。確かに、多くのメタ倫理学の論争が踏み絵の如くヒューム主義か反ヒューム主義かの信条表明をまずもってしなければならなかったことには確かに相応の理由がある。とはいえ、「ヒューム主義」という思考の枠組みそれ自体の哲学的意義を明らかにするためには、その論争状況の外部から、かつ、大きな関心をもって研究を遂行する視点が有効であろう。

(4) 本研究を通じて、「ヒューム主義」の系譜とその哲学的意義が文献的根拠をもって明らかにされると見込まれる。「ヒューム主義」という切り口から、とりわけ 20 世紀後半以降の行為論や道徳心理学、メタ倫理学の議論を整理・分析することは、未だ本格的に行なわれていない未踏の作業であり、今後の倫理学の論争の方向性を左右するインパクトをもつ可能性もあると思われる。また、現代の合理的意思決定理論において前提として用いられている心理モデルも、欲求と信念から構成されるヒューム主義的なものであり、広い意味で、現代の科学技術をめぐる倫理的諸問題に関していかなる意思決定のあり方が求められるのか、といったきわめて喫

緊の問題にもつながりうる成果が得られると期待される。

３．研究の方法

(1) 2009 年度は、「ヒューム主義」に関して、メタ倫理学文献の収集と、現代倫理学の主要著作間の連関の繙きを実施した。系譜を描き出す方法として、現代の最新版ヒューム主義から、その依って立つ先行研究へと遡り続けて、19 世紀終わりから 20 世紀初頭にかけての時期にまでその来歴を辿るという手法を採用した。21 世紀最初の 10 年間の「ヒューム主義」を規定したテーゼの原型をマイケル・スミスによる『道徳の中心問題』前後の定式化にみいだし、そこに含まれる「信念／欲求の心理モデル」、「適合の向き」、「実践理性の懐疑論」についてそれぞれの来歴を文献的に辿った。

(2)2010 年度は、前年度に収集した資料とその簡易的分析に基づき、哲学的分析を施しながら、19 世紀から 20 世紀にかけての英語圏の倫理学史という文脈の中での「ヒューム主義」の哲学的含意・意義を明らかにすることを試みた。

４．研究成果

(1) 2009 年度の研究によって示唆された哲学史的解釈の萌芽的方向性は、現代倫理学における「ヒューム主義」の主たる起源は、ヒューム哲学にあるというよりむしろ、H. シジウィックらが取り組んだ 19 世紀後半の「実践理性の二元論」的課題や、合理的意思決定論を含む現代行為論である、ということ、および、現在とは異なる発展の可能性として、オースティン以降の言語行為論・言語コミュニケーションの哲学に連なる「ヒューム主義」がありえたのではないか、ということである。実際、文献的に明らかなのは、ヒュームの道徳哲学が英語圏の倫理学者たちによって本格的に注目され始めたのは比較的最近のことだということである。これらの知見は、ムーア以降、直観主義、情動主義、指令主義などと辿って行く従来通りのメタ倫理学史の視座からは見えにくい思想連関であり、従来の「正史」を覆すには至らないまでも、一定程度楔を打ち込む効果が見込まれるはずである。というのも、哲学史を重視しないメタ倫理学の思潮の中では、ある時点で強いインパクトをもった概念図式がそのまま過去へと外挿されて歴史観を変容させることが起こりやすく、その吟味には一定の哲学的かつ哲学史的意義があると思われるからである。

(2) 2009 年度において明確になった「ヒューム主義」の三つの系譜（(a)信念／欲求モデル、(b)適合の向き、(c)実践理性の懐疑論）をそれぞれ個別に探究することが 2010 年度の課題であった。(a)について、ヒューム研究者および心の哲学の専門家らとの議論を通じて、信念／欲求モデルの哲学的重要性について検討し、現代倫理学の「ヒューム主義」がその一角を成すに過ぎないこと等を学んだ。それとともに、(b)について、M. スミス流の「適合の向き」がサール流の「適合の向き」と実質的に異なっている背景に、その理論的妥当性をめぐる見解の相違があり、それが「ヒューム主義」の哲学的重要性を高めうるかもしれない、という見通しを得た。さらに、(c)について、内在主義／外在主義論争の百年間の系譜を具体的に追うことで、この論争に現代倫理学史上の位置づけを与えようと試みた。その過程で暫定的に明らかになったのは、この論争が、そもそも直観による「正しさ」の把握と動機づけとの関係を神や信仰を持ち出さずにいかにして説明しうるか、という課題に深く関わっており、直観主義理論における動機づけ理論の確立という側面をもつ、ということである。さらに、後のカント主義的なアプローチの隆盛により、その対抗理論としての動機づけのヒューム主義理論がいっそう鮮明になった、ということも明らかになった。これらを総合的に踏まえ、2009 年度の文献的な系譜研究と合わせることで、いよいよ「ヒューム主義」という思考の枠組みがもつ哲学的含意と有効性を論じる準備が整ったことになる。本研究課題によって、分析倫理学の論争上、多くの哲学的な争点が理論装置の洗練のために切り詰められてきたということがより明示的になったと思われる。

(3) ヒューム哲学と「ヒューム主義」理論との比較研究は散見されるが、「ヒューム主義」理論の系譜を哲学史的に探ろうとする試みは、国内外を通じて見られない。現代倫理学を行う上で対決を余儀なくされる「ヒューム主義」がいかなる哲学的な意味をもっているのかを探求する本研究の成果は、少なからず、問題の理解枠組みに影響を与えることになると思われる。今後は、さらに文献的証拠を積み重ね、学術論文として成果を発表して行く予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計３件）

① 奥田太郎、「よりヒューム的な道徳心理学を構想する―共感、コンヴェンション、そして会話―」、日本イギリス哲学会第 35 回大会 ヒューム生誕 300 年記念シン

ポジウム「いまなぜヒュームか」、2011年3月28日、京都大学（京都府）

② 奥田太郎、「内在主義／外在主義論争で何が問題になってきたのか―分析倫理学者による闘いの足場を確認する―」、日本倫理学会第61回大会主題別討議、2010年10月9日、慶應義塾大学（東京都）

③ 奥田太郎、「現代倫理学における「ヒューム主義」の系譜と起源」、日本イギリス哲学会関西部会、2009年12月5日、キャンパスプラザ京都（京都府）

６．研究組織

(1)研究代表者

奥田　太郎（OKUDA TARO）
南山大学・人文学部・准教授
研究者番号：２０３６７７２５